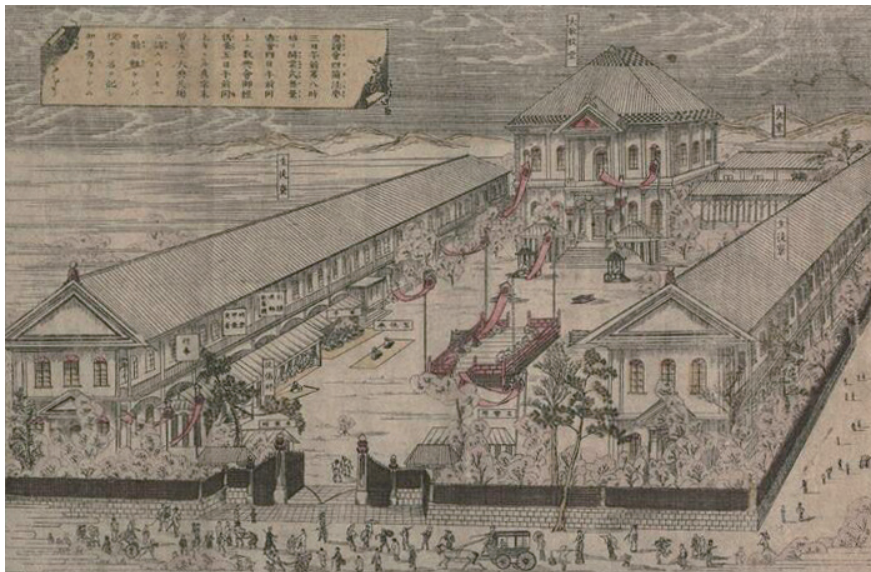


龍谷大学文学部

# 文学部 学ぶと いうこと

で





きょうせんえしかほうようのず

## 慶讃会四箇法要之図

本学は380年余りの歴史を有する大学です。江戸時代初期の本願寺の学寮から始まり、学林、大教校、佛教大学など名称や制度を変えながら、今日の龍谷大学に至っています。この大宮図書館がある大宮キャンパスは、本学の始まりの場所である本願寺に隣接しており、3キャンパスの中で、最も古い歴史を持っています。大宮図書館には、現在約75万冊余りの蔵書があり、本学の歴史を今に伝える資料が数多く所蔵されています。写真は、大宮キャンパス本館の落成を祝った法要を版画にした「慶讃会四箇法要之図」です。





# 文学部の学び とは何か

## SPECIAL INTERVIEW

2018年にスタートした龍谷IP (Inventive Program)。

「人文知を活かした新たな社会活動の試み」をテーマに、

従来の文学部のイメージや学習内容とは異なる

数多くの「プロジェクト」を実践してきました。

そこで、文学部がこのような試みに挑んだ理由、5年目を迎えての成果、

龍谷大学にしかない新たな文学部の展望などを、

入澤崇学長と玉木興慈文学部長が、

出羽孝行文学部教授を司会進行役に語りました。



(左) 玉木興慈 文学部長、(中央) 入澤崇 学長、(右) 出羽孝行 文学部教授

今を、未来を生き抜く  
ために不可欠な学問

■出羽 まず、お聞かせいただきたい点が、文学部の学び、人文知とは何か、社会とのつながりがどこにあるのかです。というのも、高校生や受験生、文学部の学生であっても、文学部はどちらかというと社会とのつながりが薄い、仏教や歴史、文学などの学問は社会とかけ離れるといった認識があるようなのです。

■入澤 確かに文学部の専門領域は、これまで社会との結びつきがあまり強くありませんでした。しかし、私は、社会が危機的状況になればなるほど「人文知」が必要になると確信しています。人文知とは、文学や歴史学、哲学など文学部の学びから身につく、人生を豊かにする、強く生き抜くための素養です。今、コロナ禍やロシアのウクライナ侵攻といった予測し得なかつ

たことが次々と起こっています。さらに社会や地域は、いたるところに問題を抱えています。それらを目の当たりにした時に、私たちは、なぜこのような事態が起きているのか、この事態をどのように捉え乗り越えればいいのかを考えます。これこそが人文知であり、湧き上がった人文知によって、危機的状況にも対応できるのです。残念なことに、

■玉木 私の専門である真宗教義学においても、「危機に根ざす」との言葉があります。社会や時代が危機に直面した時、人びとに求められるものが宗教であり、龍谷大学の建学の精神、大学が歩んできた歴史に通じるものがあると思います。私は、龍谷大学文学部で研究、教育している人文知とは、突き詰めていくと「言葉」というものになるのではと考えています。例えば、龍谷IPで目指した社会・地域との協働に際して、今、直面している課題も、今は気づいていない問題も、「言葉」によって切り取っていくことができます。社会や人間の危機の救いとなるもの、抱える問題の本質を見極めるといことは、これからの時代にいっそう求められていくでしょうし、その時に人文知が必須になるのではないのでしょうか。

■出羽 「人文知の逆襲」とは、刺激的なワードです。こういう危機的状況下では、むしろ人文の出番、対応できる局面が多々あるということですね。では、玉木先生は人文知、人文知をどのようにお考えですか。

■出羽 確かにそうですね。「言葉」は文学部の大きな軸になるものであり、言葉を用い

学生も教員も人文知を  
活かすために外へ！

■出羽 それでは、どうして龍谷大学文学部は、龍谷IPによる社会とのつながりの構築に挑んだのでしょうか。

■入澤 今、学問は、社会に役に立つか、否かに主眼が置かれる傾向が強くなっています。大学進学や学部決定の際にも、役に立つか、役に立たないかで

れば、人間や社会の問題にも深く切り込むことができる点だと思います。こういった言葉で課題発見と解決を実行できるのは、社会科学系の学部とはまた異なる文学部ならではの強みではないでしょうか。社会との接点が希薄であると考えている受験生はもちろん、これから龍谷大学文学部への入学を検討している高校生にとっても学んでみたいという意欲を高めることにつながると思っています。

選択されるため、高校生や受験生には、文学部の学問領域は社会では役に立たないように映ってしまうのでしょうか。しかし、冒頭でも申したとおり、人文知とは私たちが豊かに、強く生き抜くための素養です。例えるなら、私たちが歩く時、道に接して役立っているのは靴底です。その時、靴底の面積しかないような細く、狭い道を歩くことになると、まるで平均台や綱渡りのようで、不安や危険を強いられるように感じるとはとうとういいます。安心して歩けるとはとうとういいます。靴底に接していない面、つまり広い面があるからです。私はこの靴底に接していない面、広い面を学ぶことが人文知であると思うのです。得られた人文知は、安心感を持って、自らの人生を歩み、生き抜くことにつながります。ただ、こういったことは、若い人達にはなかなか伝わりにくいんですよね。そこで、興味・関心を引き出す必要があることから、龍谷IPに取り組んだわけ



■出羽 龍谷大学文学部に魅力を感じ、ここで学びたいと思ってもらえる仕掛けですね。

■入澤 そうです。人文学には、研究室に閉じこもって、机の上で本をひたすら読むといった、暗い、活気がないというイメージがある一方で、学習や進学を選択肢から消えてしまうことが少なくありませんでした。自省の念も含めて、あえて申し上げると、こういったイメージを作り上げたのは、人文学の研究者、教員が社会性を持ち合わせていなかったことに一因があるかと思います。私も学生時代を振り返ると、まったくといって社会を意識していませんでした。しかし、仏教研究のために渡ったインドで、仏教が生まれた地域や社会背景に触れた時、初めて社会というものに目を見開き、自らの学問を見つめ直したのです。つまり、人文学を教える側も発想や思考の転換を図り、社会に目を向ける必要があるのではないのでしょうか。

では、意欲が湧かず、学習も進んでいきません。しかし、自らが問う中で「あれ？」と疑問を感じると、知りたいという好奇心から積極的に調べたり、教員や友人に質問したりといった動きが自然と出てきます。そのため、とくに一年生、二年生という初年次の学生に対しては、「問い」を投げかけ、自主性を促すよう心がけてきました。

■出羽 私は、今、高等学校の探究学習について調査しているのですが、これまで教員は生徒に知識を伝達する側でした。しかし、自らの疑問や身の回りの出来事、社会の課題を探究するとき、教員も生徒、学生と同じ探究する側の立場になります。

■玉木 はい。その点も重要だと思っています。そもそも龍谷大学は全学的に教員と共に学ぶという素地があるのですが、今回、文学部の多くの先生方が龍谷IPの取り組みを「これからの文学部、学生、社会に

■出羽 入澤学長がおっしゃる、研究者や教員にも社会性が必要という点について、私も龍谷IPに取り組み中で、人文学、人文知が社会にどうつながり、活かされるのか、改めて考えた時、教員自身が文学部の魅力を使い切れていなかったのではという課題感を抱きました。龍谷IPの最前線に立たれている玉木先生はいかがでしたでしょうか。

■玉木 はい。私もお二人と同じ問題意識を持ちました。社会の役には立たない、暗い

といったことから選択肢からフェードアウトしてしまう文学部にいかにも興味・関心を持ってもらうか。ひとつ、自分の経験からお話すると、私は龍谷大学大学院生時代に所属していたゼミの先生から大きな影響を受け、この道が拓けました。先生は学問に対して大変厳しい姿勢をお持ちの反面、私たちに指導くださる際も、自ら研究される際も、本当に楽しそうに取り組んでおられるのです。私はそういった先生の姿勢、先生自身の魅力に惹かれ、人文学にはまり



不可欠」と共感くださり、教員、学生という立場を越えて一緒に社会に目を向けて、尽力いただきました。

■出羽 教員自身が自由な発想のもとで教育に携わると、学生にも自由な文化が生まれ、さまざまな物事や事象に対する関心も高まっていきますね。

■入澤 そうですね。文部科学省の方針をはじめ教育変革が進む中、文学部の先生方が従来の文学部にはなかったアクティブラーニングを取り入

込んでいきました。だからこそ、研究者や教員自身が楽しみを見出し、教育をおこなっていくことが、高校生や学生たちに文学部、人文学の魅力伝えるために大切だと思うのです。

■出羽 なるほど。私たちの姿勢や教え方も魅力として伝わるわけですね。高校生や学生たちに文学部、人文学の面白さや楽しさを伝えるために何か工夫されたことはありますか。

■玉木 はい。現在、中学校・高等学校での教育では、自分で「問い」を見つけ、解決していくとする自主的な学びが加速度的に進んでいます。この「問い」ということは文学部の学びそのものであり、面白さであると思うのです。例えば、世間で当たり前の常識をもっと自由に、もっと根本的に掘り下げて、問い直してみる。教員の考えを一方的に受け止めて、言われたことを単に覚えたり、調べたり

について、玉木先生から紹介いただけますか。

■玉木 まず代表的なものが『京都えきにし』という京都駅から西側のエリアの魅力的なスポットやイベント、人びとを紹介する冊子の制作・発行です。このエリアの活性化を目標に、文学部の学生たちが誌面の企画・編集からエリアのスポットや企業、人びとの取材、記事の執筆まで、すべてを担当します。一般の方に広く配布し、読んでいただくことが社会とのつながりという点で大きな意味があり、内容の評価・感想は学生たちの励み、達成感となっています。冊子以外にも、京都市下京区の「魅力」を独自のテーマで切り取ったオリジナルマップの制作、オーガニックコスメ・ギフト開発プロジェクト、企業のキャッチコピーを作るブランドメッセージ制作プロジェクトといった、今までの文学部にはないプロジェクトにも「言葉」を用いる文学部の学び

### 文学部らしい社会的意義のあるプロジェクトの数々

■出羽 それでは、龍谷IPの具体的な取り組みや成果に

を活かしつつ、取り組んできて、現在進行形のものもあります。

■入澤 社会とのつながりという点で、私はいたるところで、この『京都えきにし』をアピールしているのですが、取材を受けた方々が「普段は接する機会が少ない若い学生と話ができて楽しい」「新しい感性や考え方もキャッチできる」などと、大変喜んでいただいているとの声をたくさん耳にします。学生たちも講義室から飛び出し、自分の足を使ってエリアを巡り、人びとに接することで、今まで知らなかったことに気づき、学び、社会性がどんどん身についていると思いますね。

■玉木 私もそう思います。この社会性の醸成に加えて、龍谷IPの成果として感じているのが、文学部の横のつながりの構築です。文学部は入学直後から学科専攻に分かれて学習するため、とすれば、

他の学科は何を学んでいるのか知らないケースもあります。龍谷IPでは全学科専攻が共に取り組むことで、自分が当たり前だと思っていた学び方が他学科では違っていたり、異なる領域の人文学について知ったり、学部内での多様性や社会性、学生一人ひとりの視野の広がりを実現できたのではと思います。

■出羽 確かにそうですね。実は文学部の教員同士でも他学科の研究や学習内容を把握していないことがあるのです

が、学生はそういった学科専攻の縦枠も横枠もさりと外して、他学科の学生とも教員とも交流を図っていますよね。

■入澤 コロナ禍での大学閉鎖中、新入生をはじめ学生のサポートのために、真っ先に手を挙げてくれたのが、文学部の上級生たちでした。また、龍谷ミュージアムにある「café ritā（カフェリタ）」を運営する三人のうちの一人も文学部の学生でしたよね。他にも大学や社会の動きを素早くキャッチし、アクションを起こす学生

が文学部に多いことも、龍谷大学文学部ならではのであり、龍谷IPの成果ではないかと。大変喜ばしいことです。

■玉木 出羽先生、入澤学長がおっしゃる通り、学科専攻の横のつながり、人文学と社会とのつながりというのを、学生は何の違和感も抵抗感もなく実行し、新しい感覚で達成しています。私たち教員も既存の枠にとらわれてはいけませんね。学生たちにどんどん引張ってほしいと思っています。

社会が、  
世界が求める人に！  
自分自身を高めていける

■出羽 龍谷IPによって大きく進化を遂げた龍谷大学文学部ですが、これからはどのようなになっていくか、お二人の展望や思い描いていらっしゃる未来像をお聞かせください。

メッセージをお願いします。

■入澤 龍谷大学は二〇二三年心理学部が誕生し、全十学部になりました。それに伴い、本学が推進していることが「キャンパスデザイン」です。深草キャンパスは社会科学領域、大宮キャンパスは人文科学領域、瀬田キャンパスは自然科学領域と、学問系統で三キャンパスに分けているのですが、教員からは深草、瀬田にも人文学系学科が必要なのではないかという意見が上がっています。もちろん、私もそう考えていて、学部、領域を横断して、全学的に充実させていきたいわけです。その中で人文知というものは非常に柔軟で軽やかな学問であり、あらゆる領域の学問、プロジェクトのベースにもなります。一例を挙げると、以前、私が携わった龍谷ミュージアムに常設展示されている仏教壁画の復元プロジェクト（NHKスペシャル 新シルクロード第二集トルファン 灼熱の大画廊）で放映、二〇〇五年）です。文学部と、当時の理工学部（現…先端理工学部）、光学機器メーカーが協働し、デ



ジタル技術を駆使して復元をおこないました。その際、いわゆる理系の研究者や技術者は仏教、歴史に関心を持ち、文学部の研究者は、科学技術と人文知の相乗効果に限りない可能性を見出しました。こういった経験則をふまえて言うと、人文学が学部間の結びつきを強めてくれるでしょうし、

■玉木 入澤学長がおっしゃる「文理融合」を実現し、龍谷大学ならではの全学的な特色になっていくはずですね。

る文理融合にもつながると思うのですが、私は龍谷IPでの取り組みを全学的に波及させていきたいと考えています。また、文学部に入学した時に、中学・高校から実践してきた探究型学習を継続できるよう、教員もいっそう工夫し、学習者本位の人文学を推進していきます。

■出羽 最後に龍谷大学文学部で学ぶメリットや魅力を改めて教えてください。併せて、龍谷大学文学部への入学を志望する、検討する皆さんにも

■玉木 龍谷大学文学部の学



# FACULTY OF LETTERS

## 学科・専攻紹介

- 12 真宗学科
- 14 仏教学科
- 16 哲学科 哲学専攻
- 18 哲学科 教育学専攻
- 20 臨床心理学科
- 22 歴史学科 日本史学専攻
- 24 歴史学科 東洋史学専攻
- 26 歴史学科 仏教史学専攻
- 28 歴史学科 文化遺産学専攻
- 30 日本語日本文学科
- 32 英語英米文学科

びは、仏教や思想も、歴史や文学も、過去を対象にしていると思われがちです。しかし、私たちは今を生きているわけですから、過去を今の言葉でどう語るか、これからどう活かすかを見出すことが重要です。過去を学ぶということは、過去の事象にも共通する普遍的なもの、本質的なものを、そして今に通じるものを見極めていくことです。つまり、人文学を学べば、今の時代を読み解く力や本質を見抜く力が備わり、どんな事象にも対処していきます。さらに、龍谷大学文学部は、入澤学長がおっしゃった建学の精神や、自省利他の行動哲学を学習し、行動において実践しています。この自省は自ら省みるという意味ですが、「省」という漢字は、「少」という漢字と「目」という漢字を組み合わせています。これは、遠くを見る時のように目を細めて自分や他者、物事を見ると、見えにくかったものが少し見えてくることを意味しているという面白い

を聞いたことがあります。確かにその通りだなと思います。普段は見えていない、また目を向けていない自分について、目を細めて注視すると、心の弱さであったり、至らなさであったり気づきます。そうすれば、自分にも他者にも謙虚な気持ちを持つことができます。人文学の学びからはもちろん、仏教では「色眼鏡を外す」といいますが、過信や概念といった余計なものを通すことなく、物事の本質を見極める力が備わることも龍谷大学文学部ならではだと思います。

■入澤 自己や他者に対しても、社会や物事に対しても、これまで見えていなかったことに気づき、光を当てる。自分自身が発見者になれることは魅力的ではないでしょうか。

■玉木 はい。その通りだと思います。龍谷IP事業としては二〇二三年で終了ですが、この六年間取り組んできた人文学と社会とのつながり、プ

ロジェクトなどは継続していきます。龍谷大学文学部で学び、人文学から得た人文知を、自らや他者のため、社会のために、発信していったほしいです。

■入澤 もうひとつ、龍谷大学文学部は、これまで代議士やファッションモデル、ボクシングチャンピオンといった、異色の卒業生を多数輩出しています。彼らは口を揃えて「文学部の学びが今に活かされている」と言ってくれます。先ほど、文理融合が龍谷大学の強みと申しましたが、いい化学反応が起こる大学であることも大きな特色です。ただ単位を取るため、就職するために学ぶ、ただ卒業するために論文を書くのではなく、ややオーバーな表現にはなりますが、学生さんたちが命をかけて取り組む、生涯にわたって学び続けていくテーマを発見することも龍谷大学文学部の魅力だと思っています。

## PROFILE

龍谷大学 学長

入澤 崇

龍谷大学学長、龍谷大学文学部教授、龍谷ミュージアム元館長、広島県善行寺住職 インドをはじめとしたアジア各地で遺跡の調査を行っており、2005年より龍谷大学アフガニスタン仏教遺跡学術調査隊の隊長を務める。

龍谷大学 文学部長

玉木 興慈

1969年、大阪府生まれ。龍谷大学教授、大阪市此花区淨興寺住職。  
『教行信証に問う』（永田文昌堂）、『数異抄のことは』（本願寺出版社）ほか、著書・論文多数。





# 真宗学で「考える」 ということ



内手 弘太 講師

## はじめに

真宗学では、何を「考える」のでしょうか。それはいたってシンプルです。真宗学とは、鎌倉時代の僧侶である親鸞（一一七三～一二六二）の教えを考える学問です。

ではいま、私たちが親鸞の教えを「考える」ということに、どのような意義があるのでしょうか。「親鸞について／親鸞から」という二つの方向から見ていくことにしましょう。

## 親鸞について考える

### —— 生きるとは何か。

まず最も重要なことは、「親鸞について考える」ということです。このことについて、俳優・映画監督であった三國連太郎の言葉を挙げておきたいと思っています。

三國連太郎は映画『親鸞・白い道』を製作しましたが、その際、次のような言葉を残している。

ます。

「普通の人間と同じように恐れ、悲しみ、怒った親鸞の生き様を通して、人間として何が大切な今、何をすべきかを考えていただければ幸いです」（映画『親鸞・白い道』パンフレット、一九八六年）

親鸞という人物は浄土真宗の開祖であり、七五〇年余り信仰されてきました。ですが、真宗関係の人以外からも広く支持され、現在も親鸞に関する小説や書籍が多数刊行されています。では、なぜ支持されてきたのか。

上の三國の言葉によると、親鸞は我々と同様に、悩み・恐れ・怒った人間であり、そうしたなかで、生きるとは何か、人間とは何かということ深く考えたといえます。ここに親鸞が支持されてきた理由と彼について考える意義があるといえます（後で詳しく考えます）。

さて、その「親鸞について

考える」ために、真宗学ではどのような方法を用いるのか。主に二つの方法があります。

（１）親鸞の著した書物を読み解く。親鸞は八八年の生涯の中で、多数の書物を著わしています。その著作に書かれた言葉の一つ一つ丁寧に読解し、親鸞の教えについて学んでいきます。

（２）親鸞にいたるインド・中国・日本の仏教思想について学んでいく。仏教は紀元前のインドで釈尊により発見された真理であり、それが現在にまで伝わっています。親鸞の教えもこうした仏教の歴史のなかにあります。仏教の歴史や思想もあわせて学ぶことを通して、親鸞が時代・場所を越えた仏教をどのように受け止め、何を求めたのか、考えていきます。

こうした親鸞や仏教の教えを丁寧に紐解いた上で、親鸞の悩

みや喜びについて考えていく。それにより、「生きるとは何か」といった根幹の問いに迫っていきます。これは、次の「親鸞から考える」につながります。

## 親鸞から考える

### —— 自分のものさしから 離れ、弱さから向き合う。

親鸞と弟子唯円との会話に、次のようなものが残されています。

（親鸞） 唯円よ、私のいうことを信じるか。

（唯円） はい、信じます。

（親鸞） それでは、私がいうことに背かないか。

（唯円） つつしんでお受けします。

（親鸞） では、人を千人殺してくれないか、そうすれば往生は確かなものになるだろう。

（唯円） 私は一人として殺すことはできません。

（親鸞） それではなぜ、私の言うことに背かないのか。

これでわかるだろう。すべてのことが自分の思い通りになるのなら、浄土に往生するために千人の人を殺せとわたしがいったときには、すぐに殺すことができるはずである。だけど、思い通りに殺すことのできる縁がないから、私たちは一人も殺さないだけなのである。自分の心が優れているから殺さないわけではない。また、殺すつもりがなくても、人を殺すこともあるだろう。（『歎異抄』第十三条）

この部分だけを切り取ると、非常に驚くことが書かれています。倫理・道徳から考えると、人を傷つけることは許されることではありせんし、仏教でも重い罪の一つとして数えられています。ですが、親鸞は「状況次第で何をすべきかわからない。それが我々なのだ」と説いたわけですね。

な出来事が頻発するのでしょいか。親鸞の教えに限らず、宗教を学ぶことは、自分の価値観やもののさしから離れ、その輪郭を捉え返すことにつながっていきます。私たちは知らず知らずのうちに、色々なことに縛られています。それは決して悪いことだけではありませんが、そのものさしから離れることで、少し自由になれるのではないのでしょうか。こういう考えもあるのでは、こう考えてみてほしいのでは。こうした思考は人生の幅を広げるとともに、ある問題や疑問を異なる角度から捉え直すことにもなるはずです。もう一つ。この対話は、先の人間の弱さに向き合った親鸞を象徴するものだと考えられます。状況によって、怒りや悲しみ、悩み、喜び、様々な感情が生じてくる。ここに、人間の弱さがあると親鸞はいます。こうした「自分自身のあり方と向き合う」道こそが、親鸞の説いた浄土真宗であること

もに、その自身の／人間の弱さと向き合いつつ、その弱さからどのように「生きるのか」を問い続けていく。ここに真宗学で「考える」ことの本質があります。

## まとめ

親鸞にとって仏教とは何だったのか。なぜインドに誕生した仏教が、二五〇〇年の時・場所を超え、今なお、人々に信仰されているのか。そこには、倫理や道徳、資本や経済、科学技術だけでは捉えきれない、解決できない、素朴で大きな苦悩があります。

そのうえで、私たちが問題とすべきことは何か。人間の弱さに向き合い、悩み苦しんだ親鸞について学ぶことで、何か正解を出すのではなく、様々な問題について人間の弱さから考え、深めていく。それが真宗学の学びであり、真宗学で「考える」ということの意義であります。

## 仏教を大学で学ぶ ということ



野呂 靖 現・心理学部 准教授

### はじめに

多くの犠牲者を出した地下鉄サリン事件（一九九五年）から四半世紀がたちました。当時、高校生であった私にとって、テレビに映し出された惨劇はけつして忘れることのできないものですが、今の大学生にはもはや生まれる前の出来事です。一方、政治と宗教との関係が厳しく問われるできともニュースで頻繁に取り上げられるようになりました。現代の若い世代にとって宗教・仏教とはどのようなものでしょうか。

### 大学生と仏教

龍谷大学は西本願寺にルーツをもつ大学です。建学の精神が浄土真宗の思想であり、すべての新入生が仏教を必修します。あくまで印象論にすぎませんが、学生たちの宗教・仏教に対するイメージは可も

と相談された私も、うーんと悩んでしまいました。

### やわらかな視野

仏教は世俗的な論理をこえた「仏の視点」という新たな視点を提示する教えです。今から約二五〇〇年前、ブッダは私たちの生きる現実の社会とは異なった価値観があることを示したのです。したがって、「社会の役に立つか否か」という発想そのものが本質的に仏教にはなじみません。

しかし、そのうえで学生の皆さんに伝えたいのは、むしろそうした自らの論理を超えた視点の学びこそ、社会で生きていくうえで重要ではないかということです。

ふだん私たちは確固とした自我をもった「自分」が存在し、それに基づいて世界を認識し、物事を判断しています。しかし、そうした自分の認識や判断を絶対的なものとして固執

### 付記

本稿は「今、大学で仏教を学ぶ意味」と題して京都新聞（二〇二〇年三月二〇日号）に寄稿したエッセイに若干の加筆修正を加えたものです。

### 仏教を学ぶ意義

することによって苦しみが生まれてしまう。そうではなく柔軟に、さまざまな方向から物事を捉えていく大切さを仏教は説いてきたのです。

客室乗務員として多様な国籍や言語、ジェンダー、そして宗教をもつ人々と関わるるとき、実は語学力やサービス力の前提に位置づけられるものこそ、自分勝手な思い込みを離れた柔軟な視野ではないでしょうか。

悲惨な事件を生み出した、その背景は一樣ではありません。しかし、一つの見方に固執し、他者との対話を拒絶するスタイルが、健全な社会の創出に寄与するとはいえません。自らの視野が開かれていくこと。ここに、今こそ仏教や宗教を学ぶ意義があるように私は思われます。



## キャリアと哲学



山口 雅広 准教授

## はじめに

本稿において私は、大学への進学を志しておられるかたや、大学への進学後まもないかたが抱いておられるかもしれない、哲学という学問に関する以下の問いに、短く答えるつもりです。その問いとは、私たちが大学のような教育・研究機関において哲学を学問として学ぶとき、この学びは、私たちがそれぞれに自分自身のキャリア——つまり「生き方や働き方」（岩井他二〇二一・八）——を形づくることと、どのような関わりをもつのか、というものです。では、さっそく哲学とキャリアの関係を検討しましょう。

## 哲学とキャリアは、一見すると、正反対の関係にあること

哲学とキャリアのあいだには、どのような関係があるのでしょうか。一見すると、両者は、

水と油のように正反対の関係にある、と答えられるかもしれません。

キャリアは、いま触れたばかりであるように、生き方や働き方を含意することから、実生活と深く関わります。じつさいキャリアには、毎日の学びや活動を通して形成される側面があります。例えば、私があるカフェで働くことになったとしましょう。この場合、私が、そのカフェで働くことに生きがいを見つたり、接客の仕方やコーヒーの淹れ方を学んだりすれば、その連なりや積み重ねが、私のキャリアになります。

他方、哲学は、真実を明らかにするために、自明性をもつとされる常識をも疑いの対象とすることから、そこには、世間離れのした生活と結びつけられる余地があります。例えば、デカルトという近代哲学の創始者の一人は、さまざまな学問の堅固な土台を探し当てようとして、その過程において、身

体全体や手が私のものであるという身体感覚についてさえ、その真実性を疑いました（Cf. 小林二〇〇六・九一九五）。しかし、このように身体感覚を疑うことは、いうまでもなく、常識からも日常生活からも遠く離れた事態ではないでしょうか。

## 哲学とキャリアは、じつは、密接な関係にあること

けれども、よく考えてみれば、哲学とキャリアのあいだには、密接な結びつきがあることが分かります。具体的には、哲学は、私たちがキャリアを向上させたり形成したりすることの助けになる、と言えます。

そもそも私たち一人ひとりが、これからどのようなキャリアを築いていこうかと考えるとき、その基本となるものの一つは、自己分析すなわち「自分を知る」（岩井他二〇二一・一一）ことです。私たちがそれぞれ

に、「私はどのような生き方や働き方に関心を抱いているのか」とか、「私は何をすることができる（あるいはできるようなになりたい）のか」とかといった問題を検討し、みずからの関心や能力を明確にすることは、キャリアを計画したり選択したりするときの基礎的な材料となるでしょう。

ところで私たちは、どうすれば、それぞれの関心や能力を明確にできるのでしょうか。たしかに性格検査や能力検査を受けることは、その明確化のための有効な手法です。しかしそれだけでなく、「哲学対話」と呼ばれる、近年ひろまりはじめたある方法を取り入れることもまた、効果的です。ここではさしあたり「対話」は、「二人（あるいは少数）の間で、主題をめぐって交わす言論」を意味し（納富二〇二〇・二二）、「哲学」は、「根本的に、深く考える」ことや、「自分が立っている足元を見直してみる」態度を指すとしましょう（河野二〇二一・七四一七五）。いま主題をキャリアに限定し、自分

が抱く問題や考えを他者に話したり、反対に、他者が抱く疑問や見解に耳を傾けたりすることを通して、自分のその考えの前提になっている認識や価値観をじっくり検討するとき、つまり哲学的に対話するとき、私たちはそれぞれに、自分が特定のキャリアをめざすもつともな理由や熱意に気づいたり、あるいはひよつとすると特定のキャリアに価値を見つけられず、別のキャリアの検討を開始したりすることになるかもしれません。こうして私たちは、自分のキャリアを構築するのにふさわしい手段として、哲学対話を実践できます。

私たちが大学のような教育・研究機関において哲学を学問として学ぶとき、この学びは、私たちが、以上のようにキャリアの構築にも有効な哲学対話を実践するのに必要とする力を、強化します。なるほど哲学対話は、それ自体として、対話に加わる人に、偉大な哲学者たちの独創的なさまざまな考えを、学問的な知識として所有することを必ずしも求めません。この意味で

は、哲学対話は、その多様な考えを含む、哲学の専門的な学びを前提しない、と言えるかもしれません。しかし私たちは、哲学者たちの多様な考えを学び、その考えのあとをいわば追体験するかのように、哲学者たちや他の学生たちと問題を共有しつつ考察を重ねるのであれば、根本的に深く考える力を高めることもできます。ところで、このような力は、キャリアの形成にも寄与する哲学対話の実践に不可欠です。したがって、哲学を学問として学ぶことは、キャリアとのあいだに、その形成に資する力の向上につながる、そのような緊密な結びつきをもつ、と言えるのです。

## 付記

「哲学の学びは、現代社会に生きる私たちが直面するどのような問題を解決することに寄与するのか」という問いをも、当初、私は本稿において取り上げ、哲学の現代性をも紹介する予定でした。じつさいには

## 文献表

- 岩井洋・奥村玲香・元根朋美（二〇二一）『プレステップ キャリアデザイン（第五版）』、弘文堂。
- 河野哲也（二〇二一）『問う方法・考える方法「探究型の学習」のために』、筑摩書房。
- 小林道夫（二〇〇六）『デカルト入門』、筑摩書房。
- 納富信留（二〇二〇）『対話の技法』、笠間書院。
- 山口雅広（二〇二一）『哲学の学びは社会の役に立つか？』、『龍谷哲学』第四七号、八一二頁。
- 山口雅広（二〇二三）『環境問題と倫理学』、『龍谷哲学』第四九号（掲載予定）。



教育学の学びは  
社会に役立つか

出羽 孝行 教授

と考えられます。更にもう一つは教員という職業をよりやる気の持てる仕事内容にすることです。教員は私たちが生徒時代に見てきた、教えるという仕事以外に、保護者対応、書類作成など、やるべきことが多岐にわたっており、仕事が多いだけではなく、子どもと接するという本来の仕事からかけ離れた業務が多いことが問題とされています。そこで、教員の数を増やし、何をどこまで教えるかといった教育内容に関わる部分にまで個々の教師に権限を移譲するとしませう。つまり、教育課程の編成権を教員に任せるとです。

過去には堀尾輝久（一九九二）が国家の教育権を国民に取り戻そうとの主張を展開したことがあり、これは国民教育論と呼ばれています。だからといって個々の教師が自分の思ったことを勝手に子どもに教えていいということではなく、教師は保護者からの信託に基づいて目の前の子どもの状況に合わせて教育内容や教育方法を決定していくだけの専門性を有しているとの前提に立っています。家庭的にしんどい子ども、地域から孤立している子どもなど、多様な背景を持った子どもが学校には存在しており、教育のやり方もそうした背景を考慮してこそ意味を持つてくるのではないのでしょうか。国家権力と国民とを対立的にみる視点は現在では批判が存在しますが、教師は子どもをうまく教えるだけではなく、研究者でもあるべきとの考え方は現在にも通じるところがあると思います。

一方で、特に公立学校の教師は、市民による選挙で選ばれた政治家の指示に従って決められた通りの仕事をすべきと考える人々（特に政治家）がいるのも事実です。皆さんはどう考えるのでしょうか。私たちは自由で、一人一人が尊重される社会を実現するためにはまずは教師という職業の魅力を高め、「いい教師」を増やしていくことは大事ということでは多くの人が同意するのですが、「いい教師」像はどうあるべきかについては様々な意見があります。

## 参考文献

●堀尾輝久（一九九二）『人権としての教育』岩波書店

この文章に関心を持って下さった皆さんは教師という職業に関心がある人達が多いのではないかと想像します。教育学といえど、教師になる人達が学ぶものの認識がないでしょうか。確かに日本の中には教師を養成することを目的とする教育学部や教育学科が存在します。ただ、教育学は教師になる人達が学ぶためのものという考え方は、教育学を非常に狭く捉えています。例えば、法学は弁護士や検事になる人が学ぶためのものなのでしょうか。法律家を養成するためのロースクールは存在しますが、それは法学を教える機関の一部に過ぎません。よりよい社会を法学という面から支えるためには、法律家が学ぶべき知識をどのように定義するのか、また社会的弱者の権利を守るためにはどのような法律が必要かを探究するのも法学という学問にとって重要になってくるでしょう。

これを教育学の文脈で述べらば、人々が「よりよい教育」を受けられるようにするために、教えるプロたる教師がどのような知識や態度を備えるべきか、また学校の組織や教育課程はどのように組み立てられるべきかを探究していく必要があります。皆さんは小中高等学校に通っていたとき、教師の言動や学校のやり方に疑問を持ったことはないでしょうか。いじめ問題や校則問題、さらには学力向上策など、教育を取り巻く課題は山積しています。そうした課題を解決することが教育学に求められてきました。

たとえば、現在教員不足が深刻化しています。子どもたちがよい教育を受けられるためには単に人数だけではなく、「よい教師」がたくさん必要でしよう。どうすればよい教師を増やせるのでしょうか。単純化するためにここでは二つの解決策を提案してみます。まず、ひとつはひとつの解決策として、教員の仕事を今よりも魅力的なものにするということとを提案してみたいと思います。これには二つの意味が含まれています。一つは働き過ぎと言われる教員の超過勤務を減らすことです。特に小中学校では過労死ラインを越えて働いている教員が多いとされますが、こうした過剰な労働を減らすことが教職を魅力的なものにするのに意味がある

## 心理学、そして 臨床心理学の学び



伊東 秀章 現・心理学部准教授

心理学は、人間の心と行動の性質や法則を明らかにする学問です。昔は「哲学」の一分野として位置づけられてきました。その後、19世紀後半から、科学的な説明原理を前提として「人の心」という抽象的なものを「科学」として扱おうとする学問として多岐にわたって複雑に発展してきました。

現在の心理学は、「人の心」をいろいろな側面から考えるために、以下に示すような分野があります。

臨床心理学…日常の困難を感じている人の心の動き  
教育心理学…教育という場面における人の心の特徴  
人格心理学…人の性格や人格についての心の特徴  
社会心理学…社会的活動に見られる人の心の動き  
発達心理学…人の誕生から死までの成長段階ごとの心の特徴

生理心理学…人の体に起こっている生理的反応と心の動きの特徴

このようなさまざまな分野を包括して「心理学」と称しています。それぞれの心理学は、人の心についての様々な側面における考え方を学ぶことであり、人の心の動きを中心としていろいろな捉え方を考え方を学ぶことになります。

上に示したように「臨床心理学」もそのひとつです。心理学的な知識や技能を用いて、心理的な問題や悩みをもつ人に対する援助や予防を行うための実践的な学問です。臨床心理学では、個人を対象としたカウンセリングなどの個別の支援だけではなく、多様な援助のありかたを探索することをテーマとしています。

心理学に対する俗説として、「心理学を学ぶと人の心が読めるようになる」という話を耳にすることもありますが、

「心」が読めるようになるのではなく、「その人の行動や感情などを多様な視点で見ることができるようになる」と言えると思います。また、そのような人の心についてのいろいろな視点を身につけることにより、これらの心理学に関する知識や知見を使って、人の心について臨床・教育・社会・発達・生理などの側面から多様に捉えることができるようになります。そして、「人の心」について、自分ではいろいろな側面で考えられるようになるということが、心理学を学ぶ最大の意味だと言えます。

その中でも、臨床心理学は、心に悩みを抱えた人へ専門的知見を生かしながら寄り添うことができることを目的としています。人への深い理解と思いやりを備え、コミュニケーション・スキルを用いていかに対人援助を実践するのかを追求する学問です。

昨今、臨床心理士や公認心理師など、臨床心理学の専門スキルを持った人材への期待が高まっています。病院で活躍する心理士はもちろん、学校、各種福祉施設など、臨床心理学的見地から問題を抱えた人々に寄り添い、問題を解決できる心理専門職が求められているのです。

臨床心理学が対象とする領域は、医療、福祉、教育、産業など幅広く設定されます。ここでは、龍谷大学臨床心理学が重要視する、医療・福祉領域、学校領域、ビハラー領域の三つに焦点を合わせて示します。

### (一) 医療・福祉領域

多様な医療現場や社会的弱者に対する福祉の支援の現場における心理的援助の研究・実践に重点を置く領域です。

この領域では、医療や福祉の現場体験からその実態を把握することで、医療従事者や福祉施設の介護職員、保育士、指導員等が行う援助技術を学

修するとともに、それらの現場における実践と研究を展開していくこととなります。

大学卒業後は、精神的・心理的なケアを行っている精神医療施設等の事務職や医療事務、各種の現場経験や実践講習を経て受験資格を得ることのできる介護やヘルパー等の高齢者支援職、児童福祉施設における児童指導員、民間企業、社会福祉法人、大学院進学、公務員等の進路を視野に入れた学びといえます。

### (二) 学校領域

学校教育や保育の現場の多様な実態における個人や集団への心理的援助の研究・実践に重点を置く領域です。

この領域では、学校教育の実際を把握するとともに、教育現場の特別支援教育にかかわる発達支援やその教育補助、児童生徒に対する福祉・心理的援助の活動について学修し、それらの現場における実践と研究を展開していくこととなります。

大学卒業後は、学校教員、特別支援教育の補助的支援職員、児童福祉施設・情緒障害児施設等の「児童養護関連施設」における生活指導員（心理職を除く）、児童指導員（心理職を除く）、民間企業、大学院進学、公務員等の進路を視野に入れた学びといえます。

### (三) ビハラー領域

ビハラー活動（主にターミナルケア、緩和ケア）を通して、関連する医療・福祉施設等での心理的援助を学ぶとともに、仏教カウんセリングを中心にビハラー活動の研究・実践に重点を置く領域です。

この領域では、龍谷大学の建学の精神を重視したビハラー活動や仏教カウんセリングについて、関連施設での実践活動を通じて福祉的・心理的援助の現場を体験します。また、仏教における心理的対人援助を理解することで、ビハラー活動にかかわる心理的支援のあり方について学修し、現場における実践と研究を展開

していくこととなります。

大学卒業後は、寺院、民間企業、NPO法人職員、大学院進学、公務員等の進路を視野に入れた学びといえます。

臨床心理学科で学んだ知識や技能は、公認心理師・臨床心理士など、「心理」と名のつく一部の職業にのみ活かされるものではありません。心理学は「人を科学的に理解する」という姿勢の考え方を基盤としているため、人のかかわるすべての場面、いわば、すべての職業や立場にとって役立つ学問であり、社会に対して多様な貢献が今後も期待される学問なのです。

## 歴史は 何の役に立つのか



藤原 正信 教授

「パパ、だから歴史は何の役に立つのか説明してよ」と息子に問われたフランスの中世史家マルク・ブロック（一八八六—一九四四）は、『歴史のための弁明』（邦訳新版二〇〇四年）を著しました。その後、ナチス・ドイツに対する抵抗運動に加わって捕えられ、銃殺されたのは有名な話です。例えば、『現代史を学ぶ』（一九九五年）の著者の溪内謙氏など、同書に学んだ歴史研究者は少なくないと思います。

彼は、「たしかに、ほかに役立つことがないと判断されねばならないとしても、それが気晴らしになるという点は歴史の利点として挙げることでできるだろう」と述べてつづき、「歴史がブリッジや釣りのような愛すべき余暇のひとつにすぎないのであれば、歴史はそれを書くためにわれわれが傾注する努力すべてに値するものであるうか」と質しています。

そして、「他の方面でよりよく活躍できそうなるすべての精神の持ち主には歴史学を実践しないように勧めるべきか、あるいは歴史学は知識としてみずからの良心に恥じるところがないことを証明するか」しなればならないとも。あとは図書館で実物を手に取ってもらおうとして、「歴史は何の役に立つのか」という問いは、真摯に歴史学研究に携わる人にとっても、それを志す人にとっても、実に悩ましい問題であり続けました。

その上、二〇〇六年の教育基本法の改定で、大学は「成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする」（第七条）と位置づけられました。大学は「社会」の役に立たなければならぬと明文化されたことによつて、歴史学をはじめとする人文科学を取り巻く状況は窮屈になったように思われます。さらに、「社会的要請」を理由

として、二〇一五年の文部科学省通知が国公立大学に対して文系学部の見直しを迫ったことを知っている人もあるでしょう。極めつけは、いわゆる「稼げる大学」法案が二〇二二年五月に国会で可決されました。理系の研究で収益が上がった大学については人文・社会科学研究もお零れに預かれるのだから（駒込武「大学の解体、民主主義の解体」『世界』二〇二二年八月号）。

ところで、教育基本法の前文には「民主的で文化的な国家を更に発展させる」とあり、条文でも「国家」と「社会」が混在していて、「国家」を剥き出しにすることを憚りながらも、微妙に按配されているようです。そもそも、「社会」という言葉は明治十年代以降に多用されるので、*society* に相当する日本語はなかったそうです。また、その基盤であるはずの *individual* が「個人」という訳語で定着したの

は明治二〇年代とのことですが、いずれも本来的な意味で理解されるのはなかなか難しい言葉だったようです（柳父章『翻訳語成立事情』一九八二年）。

さて、受験生に向けた龍谷大学文学部パンフレットの日本史学専攻のページでは、毎年「従来の研究に学びつつ、自分なりの問いから歴史事実を究明し、未来を造る主体として今を生きる」という見出しを付けて、二つのことを求めています。

一つは、確かな問題意識から課題を定め、先行する研究の到達点や問題点を整理し、証拠となる史料を発見・読解して、それらを総合的に考察して文章化することです。それが卒業論文なのですが、けっして簡単にはゆきません。高校教科書『詳説日本史B』の執筆者のひとりである高畑利彦氏は学生の卒業論文を参考文献として提示しています（「後期幕藩制と天皇」『講座 前近代の天皇』第二巻一九九三年）が、かなり例外的であつて、卒業論文は良い結

果に終わらないことの方が多いのです。しかし、著名な学者の業績に圧倒され、史料読解では自らの非力に苦しみながら、自分が設定した課題について考察し答えようとする営みは、何ものにも代えがたいものです。実験して証明することのできない歴史学研究が科学たろうとすれば、必要な理論や方法などを学修し、証拠たり得る史料を見極め、それに基づいて客観的な歴史事実を再構築して表現しなければなりませんし、他者の検証に耐えられるものでなければなりません。それでも、それを成し遂げようと努力し、自らのスキルアップに心がけるような人であれば、仮に歴史学とは直結しない分野の職に就かれることになつても、その職場や社会において必要とされる存在になれることでしょう。

そしてもう一つは、歴史学を研究することを通して、自他の尊厳を共に大切に（本学においては建学の精神を體現することですが、ここでは立ち入りません）、自覚的に社会を構成する一員として、暗

澹たる思いにならざるを得ないような歴史状況であつても自立的・自律的に判断し生きてゆこうとする個人、すなわち「未来を造る主体」になつてもらうことです。「正しい歴史認識」などということが声高に言われた（言われる）ことがありますが、事の大小にかかわらず、力関係や損得勘定によつて独善的になるようでは、科学としての歴史学に携わる人とは言えないでしょう。科学とはほど遠い歴史観が国家によつて強要されたり、権力者に忖度する歴史学者がいたりしたのも、残念ながら事実です。そうしたことで、社会ではなく国家の役に立ち、権力に従属する人びとを生み出すことに歴史学は寄与してしまつたのです。

「歴史は何の役に立つのか」について、だれもが了解できるような正解などは、お察しのようにありはしないかもしれません。ただ、もう済んでしまつて変えようのない過去をわざわざ問うことを通して、好きな時代や領域の新たな課

題や歴史事実を明らかにするとともに、「歴史は何の役に立つのか」の自分なりの答えを見つめるために歴史学研究を志してみられるのも良いかもしれませぬ。

（二〇二二年八月二五日）



東洋史学を大学で  
学ぶことについて

岩尾 一史 准教授

てしまったと考えられていたのですが、なんと、マニ教の宗教絵が日本に複数残っていたことが、最新の研究でわかりました。

このような例からわかるように、日本は昔から外国の文化と繋がっていたばかりでなく、日本も含めた世界は昔から繋がっていたのです。それぞれの文化や歴史は一見異なるようにみえながらも、実は深いところで影響を与え合っていたことが、東洋史学を学ぶと如実に見えてくるのです。

いろいろと述べましたが、そもそも東洋史学という学問は研究すること自体がとても楽しい分野です。今まで知らなかった言語や文字を学び、考えたこともなかった人たちの歴史を理解すると、あたかも世界が広がったように感じます。それまでただの「外国」だった地域が、言葉と歴史を学ぶことによって、いつの間にかなじみのある場所になり、やがて第二の故郷にまでなります。壮大な中国の都城建築、どこまでも広がるモンゴルの

東洋史学というのは歴史学の分野の一つで、簡単に言うとアジアの歴史を研究する分野です。アジアは広く多様性に満ちた地域です。アラビア半島、インド、中央アジア、シベリア、中国などの地域がアジアに含まれます。そして、そこに展開される歴史もさまざまです。秦の始皇帝や三国志に代表されるような中国の歴史はもちろんのこと、朝鮮半島、チンギス・ハンで有名なモンゴル、チベット、砂漠のシルクロード、中央アジアの国々、イラン、イラク、地中海沿岸、北アフリカなどなど、すべて東洋史学の範囲です。

これらのさまざまな気候、環境、生活習慣、信仰、言語や文字で暮らしている人々の生活や文化を知ることができ、そののが、東洋史学の一歩の魅力です。草原で暮らす遊牧民、高地に暮らすひとびと、砂漠のオアシスの生活など、日本の日常と全く異なる生活、文

草原、夕刻に響き渡るイスラム寺院のアザン（礼拝の祈り）、砂漠のオアシス都市で感じる苛烈なまでの暑さと寒さ、。観光旅行でも体験できることもありませんが、現地の過去を彼らの残した歴史史料で学べば、私たちは異文化をより深く、そして重層的に知ることができるのです。

異文化といえば、英米文化や英語を思い浮かべる人が多いでしょうが、アジアに目を向けると、他にもさまざまな言語と文化があり、それぞれに固有の歴史があることがわかります。そんなの当たり前じゃないか、と思う人もいるかもしれません。しかし、単に想像することと、現地の言語で書かれた史料を読み、自分の中で消化して追体験することとは、雲泥の差があります。東洋史学でアジアの歴史と文化を体験し、みなさんの世界を広げませんか。歴史やアジアに興味がある方に、東洋史学の門を叩くことをおすすめします。

化、歴史を学ぶことができるのです。

私たちと異なる言語の史料を読み、異文化の歴史を学ぶことは、人間の歴史を客観的に考える上でとても重要です。さらに面白いのは、時代も文化も異なる他者なのに、彼らの残した歴史史料を読むと、その生き方や考え方に共感を覚えることがよくあるのです。

中国の書である『文選』『帰田賦』中の「仲春令月、時和氣清」（仲春の良き時に、気候は和やかで空気は清々しい）を踏まえた句であることがわかりました。元ネタの『文選』は当時の日本の知識層にはよく読まれていたから、この個所をアレنجしたものであることは、当時の常識だったのでしょう。

時代や文化が異なっても人間は人間です。我々は現在だけでなく過去のひとびとも学ぶことができるのです。

日本は、古来より朝鮮半島や中国を介して、さまざまな外来文化を消化して採り入れてきました。仏教もその一つです。元々はインドの北方にはじまった宗教でしたが、シルクロードを通り、中国・朝鮮半島を介して日本にも渡り、そして定着したのです。

アジアの歴史は、もちろん日本の歴史や文化にも深く関係しています。一例を挙げましょう。日本の元号は基本的に中国の古典の中から言葉が選ばれてきましたが、令和は日本の古典から選ばれたので話題になりましたね。ところが令和のもとになった『万葉集』中の「初春令月、氣淑風和」（初春の良き月に、空気は美しく風も和やか）は、もともと

また、かつてキリスト教と並ぶくらい流行したものの、滅んでしまったマニ教という宗教がありました。マニ教は宗教絵を使って布教活動していたことがわかっていたものの、その宗教絵はもう無くなっ

## 仏教史学を大学で 学ぶということ



斎藤 信行 准教授

ではないでしょうか。気づいていないだけで、無自覚な宗教心も私たちの生き方や社会の仕組みと密接に関係しているのです。たとえば、誰もが知っている有名な企業が自社の敷地内に神社を設置したり、最も影響力を有する保守政党が特定の宗教と結びついているのも、そのことを意味しているといえます。意識して世のなかを見てみると、宗教や仏教に関するトピックは、結構、身近にあるものなのです。それらは、果たして私たちとまったく無関係なものと言えるでしょうか。

また、私たちは生きていくなかで幾多の困難や社会の不条理を乗り越えてゆかなければならないでしょう。世知辛い人間関係のなかで思い悩むことがあるかもしれません。そうした際に、「人間とは何か」「社会とは何か」ということや、「どう生きたらよいのか」ということを真剣に考える場面が出てくると思います。こうした問いかけに対して、宗教とりわけ仏教は私たちに一つの

私たちは仏教に対してどのようなイメージを持っているでしょうか。多くの人は、人が亡くなったときのお葬式、お盆やお彼岸のお墓参り、あるいは有名な寺院に行つて仏像にお願いごとをするといったイメージを持っているように思います。たしかに現状の日本の仏教はそうみえるかもしれませんが。しかし、仏教がこれまで歴史のなかで果たしてきた役割は、実に多種多様です。日本の仏教に限っても、災害・疫病・福祉・教育・差別・戦争などさまざまな出来事と仏教はかかわってきました。あまり知られていないだけで、仏教は積極的に社会とかがわつてきたのです。そのかわり方には、善い面もあれば、悪い面もあります。たとえば、仏教に基づいて差別を克服し平等な社会の実現を目指す運動や、僧侶や信者による救済事業・社会事業などの活動は善い面だといえます

が、一方で仏教による支配や差別の正当化や仏教教団の戦争協力などは負の側面だといえます。もちろん実態は善と悪に二分化できるほど単純ではありません。ただ留意する必要があるのは、本来、仏教は人間の理想的なあり方を目指す教えですが、その歴史は単なる成功・発展の歴史ではなく、そこから逸脱した負の歴史でもあったということです。

こうして多様で複雑な仏教の歴史を学ぶ上で大切なのは、自分なりの「問い」を持つことです。なぜ仏教は差別を肯定したのか、どうして仏教教団は戦争に協力したのか、どのようにして僧侶は困っている人々を救済したのか、などなど。こうした「問い」を探求することを通して、仏教史学は単に過去の出来事について考えるだけではなく、現実を相対化し、現代社会の課題や自分の生き方を見つめ直す

方向性を示してくれるでしょう。自分の経験を通して宗教が問題となったとき、仏教史への問いは現状への問いと結びつきます。こうした問いに導かれた仏教史の学びは、過去の事実を明らかにするだけではなく、今、ここでどのように生きるかを考える上でのヒントやモデルを与えてくれるに違いありません。

困の問題や福祉の問題、ジェンダーの問題などに深く関与してきました。これらの問題に仏教がどのように対処したかを学ぶことは、これからの地球や人間のためになる、新たな活動や価値を創出する上での原動力になるといえるでしょう。

とはいえ、やはり仏教史を学ぶことは、お金儲けや就労にはあまり役立たないかもしれません。では、仏教史を学ぶことは、自分のキャリアにとって何の価値もないのでしょうか。そんなことはありません。仏教史を学ぶことは、君たちがより良く生きていくうえで力にきつとなります。より良く生きるためには、経済的・物質的なものも欠かせませんが、人間的な豊かさも重要です。仏教の歴史を学ぶことは、この一度きりの人生を、人間としてどう生きるのか、という最も大切なことを考えるきっかけを与えてくれます。その学びを通して、私たちは自己と社会のありようを見つめ直し、この世のなかを寛容に人

## 文化遺産学を大学で 学ぶことについて

木許 守 教授



全体が特別史跡に指定されていて、その範囲内にある石垣の一〇％が崩落し、それを含めた全体の三〇％に緩みなどが生じて積み直しが必要となったのです。天守閣自体は一九六〇年に建築された建物で指定文化財ではありませんが、天守閣だけではなく櫓などの建物が崩落著しい石垣の上に辛うじて建っているという痛々しい映像が速報されました。この状況を見て衝撃を受けたのは、熊本の人々だけではなかったでしょう。

石垣の復旧を始め文化財建物を含む建造物の復元は大きな手間と予算が必要な事業です。しかしそれでも早く熊本城を再興してほしいと強く願ったのは、ほかならぬ被災者でもある地元の人々でした。熊本城全体の復旧は二〇三八年度に完了する計画のことですが、「復興のシンボル」とされた天守閣は発災から五年後の二〇二一年に復旧作業を終えました。その時の熊本の人々の安堵の表情はニュース番組でも報道され印象的でした。被災

一口に「文化遺産学」と言っても、その対象としている領域は幅広く、内容は多岐にわたります。本学の歴史学科文化遺産学専攻を例にとると、現在、考古学・美術史学・文化財保存修復学・文化財行政学の四分野のゼミが開講されています。共通しているのは、いずれも文化遺産という「モノ」を対象にしていることと「モノ」から考察するという点ですが、その直面する個別的な目的や方法は全く異なっています。したがって「文化遺産学の学び」について考える際もそれぞれアプローチが異なるのですが、ここでは文化財行政学の立場から考えることにします。

「行政」の概念を一口に規定することは難しいのですが、まずは、国や地方公共団体が法に基づいてその行く末を定め具体的な施策を打ち出してそれを進めて行く営みであるとしておきましょう。このことは言うまでもなく私達の実生活と

直接の関係、そして復旧していく熊本城に対する人々の熱い思いは、今もインターネットで検索すれば多くの人々の声を実名とともに閲覧することが出来ます。これは熊本城の復興が地元の人々の心の支え、つまり生きる力になっていることの証といえるものです。

文化財の活用と言えば、日本政府はコロナ前に観光活用を強く推し進めました。もちろん今もその方針は変わっていません。しかし、圧倒的多数の文化財は観光には向いていないのです。例えば、各地の村落で継承されてきた夏祭りや秋祭りは無形の民俗文化財ですが、そのほとんどは観光とは無縁です。元々、祭りとは地域の人々によって営まれ地域の中心で完結しているものであったからです。

観光客が見向きもしない文化財ばかりか、観光客や当日の参加者が多数いても、今、その継承が危ういものがあります。二〇二四年二月には岩手県「黒石寺蘇民祭」が本年をもって最後とすると報道されました。祭りの場合は少子高齢化が進行し伝統の継承者が激減していることがその理由で、そもそも地域の人々による祭りの準備が困難になっているのです。観光資源化できない祭りは消滅してもよいかというところは違いますが、地域で継承されている祭りは、皆で力を合わせないとそれを遂行できないことが多く、つまり、祭りはその地域のひとと人を結び付ける媒体の機能を果たしているからです。この時に今は祭りの担い手になっ

てきている高齢者が、地域のコミュニティを再確認できるのです。祭りという地域の文化財があるから、そこに生きる高齢者が人との繋がりを感じ、そこから何かしらの元氣を得ている場合も多いというわけです。このように、祭りは観光客を迎えなくても地域の活性化に繋がると考えられるのです。

放っておけば衰退するか消滅する文化財。しかしそれを行政が保護することで、国民の生きる力になり、経済的な意味ではなく地域を活性化することが可能になるのです。ここに行



社会を読み解くレッスン  
—大学で文学を学ぶ意義—

安藤 徹 教授



「物語」によって社会を読み解き、価値づけ、想像しているからです。社会を読み解くということは、社会に流通する「物語」を読み解くことであり、社会を変えるということとは、新たな「物語」を共創するということでもあるのです。たとえば、差別の問題です。性差別にしろ、人種差別にしろ、年齢差別にしろ、だれを主人公にし、何に焦点を合わせ、どのようなストーリーとして読み解くかによって、浮かび上がる社会の姿や解決すべき課題は大きく異なってきます。だからこそ、これまでとは異なる「物語」を描いてみることで、よりよい社会の実現をたぐり寄せることも可能なのです。「物語」には社会を動かす力があります。むしろ、つねにより方向へ動くとはかぎりません。複数の「物語」が衝突すること、社会を分断させたり、紛争や戦争を引き起こしたりすることもあります。

ここで留意したいのは、「物語」もまた言葉によって成り立っているという事実です。私たちが壮大な宇宙の物語を語り、聞き、読むことができるのは、宇宙があるからではなく、言葉があるからです。語るべき現実がなくても、語る言葉さえあれば物語は成立します。小説などの虚構作品がそうです。フィクションはまさに言葉だけの世界です。「小説など虚構作品と接することで一番鍛えられるのは、文脈を推し量る能力です」と指摘する英文学者の阿部公彦は、「完結した一個の作品世界を形成」している虚構作品と出会った際に、「私たちはその世界のルールを読み取り、了解し、かつ読書に適用する必要がある。(中略)まったく新しい世界のルールとの出会いは、豊かな可能性を秘めてもいます」(「読解力」とは何か——「読めない」の真相をさぐる「東洋大学文学部広報委員会編」ことばの危機——大学入試改革・教育政策を問う「集英社新書」二〇二〇年)と述べています。

文学とは何か。作家の高橋源一郎は、「複雑なものを複雑なままに理解しようという試み」(『丘の上のバカ——ぼくらの民主主義なんだぜ2』朝日新書、二〇一六年)であると言います。人間は社会的な動物であり、物語を語る生き物である。人間にとって「物語」とは、「物事を理解し、社会への視座をもち、どんな選択をしてどう行動すべきかを判断する」ための文脈を提供し、「私たちの「現実」を支える真実(あるいは真実と考えられるもの)であり、文化や社会を生み出すものである。とくに「説得力のあるナラティブ」は「人々に行動を起こさせる力」があり、それによって未来を「想像し、切り開いていくことは可能」である……なるほど、予測困難な時代、いわゆるVUCA (Volatility (不安定さ)・Uncertainty (不確実性)・Complexity (複雑性)・Ambiguity (曖昧性))の頭文字からなる造語)の時代を生きる私たちにとって、想像的に紡がれる「物語」は未来を創造するための一つの希望かもしれません。では、その「物語」とはいったいどのようなものなのでしょう。何かを語れば、それだけで自動的に「物語」になるのでしょうか。

最近「物語」への注目が高まっています。文学の話ではありません。経済や経営などの分野での話です。「知識経営」の生みの親として世界的に著名な経営学者の野中郁次郎による『共感経営——「物語」戦略で輝く現場』(日本経済新聞出版、二〇二〇年)、PR専門家として海外でも評価の高い本田哲也の『ナラティブ・カンパニー——企業を変革する「物語」の力』(東洋経済新報社、二〇二一年)、さらにノーベル経済学賞を受賞したロバート・J・シラーが書いた『ナラティブ経済学——経済予測の全く新しい考え方』(東洋経済新報社、二〇二一年)や、ダボス会議で有名な世界経済フォーラムを主宰するクラウス・シュワブらの『グレート・ナラティブーグレート・リセット』後の物語(日経ナショナルジオグラフィック、二〇二一年)といった本が続々と刊行されているのです。

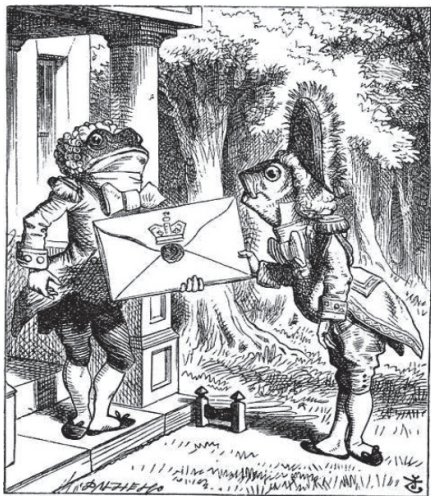
「人間は社会的な動物であり、物語を語る生き物」である。人間にとって「物語」とは、「物事を理解し、社会への視座をもち、どんな選択をしてどう行動すべきかを判断する」ための文脈を提供し、「私たちの「現実」を支える真実(あるいは真実と考えられるもの)であり、文化や社会を生み出すものである。とくに「説得力のあるナラティブ」は「人々に行動を起こさせる力」があり、それによって未来を「想像し、切り開いていくことは可能」である……なるほど、予測困難な時代、いわゆるVUCA (Volatility (不安定さ)・Uncertainty (不確実性)・Complexity (複雑性)・Ambiguity (曖昧性))の頭文字からなる造語)の時代を生きる私たちにとって、想像的に紡がれる「物語」は未来を創造するための一つの希望かもしれません。では、その「物語」とはいったいどのようなものなのでしょう。何かを語れば、それだけで自動的に「物語」になるのでしょうか。

か。説得力ある、共感を生み出す「物語」の条件は何でしょうか。「物語」にはどのような作用があるのでしょうか。可能性だけではなく、危険性も潜んでいるということはないでしょうか。こうした「物語」をめぐるさまざまな問いと向き合い、思考を深めるなかから、ほんとうに大切な「物語」を共創していくこそが、いま切実に求められています。

私たちの社会は人間関係を基盤としています。人間関係は言葉によって成立します。私たちは言葉によって物事を理解し、思考し、価値創造し、「コミュニケーション」を図り、関係を構築し、行動しているからです。したがって、社会は言葉でできているとも言えます。

その社会には多様な「物語」が溢れています。そしてどの「物語」を選択するかによって、社会は異なる様相を見せます。異なる未来が見えてきます。私たちはにして自分の人生という「物語」を創造的に紡ぎ出す力を身につけられるか。自分も含めた社会の未来をどう切り開いていくか。文学を学ぶ経験が現実社会に生かすかどうかは、あなた次第です。

なお、フィクションは小説にかぎりません。私が専門とする『源氏物語』などの物語文学もそうです。むしろ、ジャンル名に「物語」を冠する物語文学こそ、言葉によって成り立つ「物語」そのものを直接的に問い、考えるうえで絶好のテキストです。そもそも物語文学の研究は、「物語とは何か」を問う「物語学」を内包しつつ、古典文学作品としての物語をめぐるさまざまな謎の解明に挑んできました。くわえて、遠い昔に生まれ、長らく読み継がれてきた古典文学には、現代日本の社会・文化に通じる側面だけでなく、それらを異化する側面もあります。近さと遠さを併せ持つわけです。「いまここ」を照らし出し、捉え返す独特の距離感、古典文学ならではの言えるかもしれません。



出典：Lewis Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass*, 1865 and 1871,  
Oxford: Oxford UP, 2009. p.50

風刺雑誌『パンチ』に掲載されています。見栄を張り合う中流階級を辛辣に笑う風刺画です。（小池滋編『ヴィクトリアン・パンチ——図像資料で読む一九世紀世界』東京：柏書房、一九九五—一九九六、全七巻の中にありますので、探してみてください。）後者の風刺画を手掛りに『アリス』のこの挿絵を見ると、服を着たこの魚とカエルにどんな風刺が込められているのでしょうか。

このように、原作に添えられた挿絵を手掛かりに、時代背景を踏まえて作品を読むと、ストーリーを追っているだけでは気づかない物語の奥を見ることが出来ます。作品を読むとくことで作品が書かれた時代の文化・社会を探ることが出来ますし、作者が作品の中に撒いたからくりを探る面白さがあります。ミステリ好きな私にとって、文学研究は、〈謎解き〉の要素を持ったワクワクする作業です。

また、登場人物の心理に触れることで、自分と社会、他者との関係性や付き合い方のヒントが得られるかもしれません。何より、上述したように、多角的な視点で文学作品に向き合うことにより、日常生活において視点を変えて物事を見ることの大切さに気づくかもしれません。物の見方は一つではありません。ときに当たり前を疑い自らの目で検証することで、物事の本質を見極める力が養えると思います。

ここでは小説『アリス』を例にとりましたが、詩、戯曲といったジャンルにおいても、興味深い〈謎解き〉のような発見がたくさんあります。英文学には、一〇〇年以上の歴史があります。古い時代に書かれた作品の原文と格闘しながら作品を精読し、様々な解釈の可能性を探る作業もまた、知的好奇心をかき立てると思います。卒業後英語に関わる仕事に就く人にとって、文学研究は、様々な角度からイギリス文化と言語に向き合う経験となるでしょう。

以上のことは、英文学だけでなく、文学部すべての研究領域の学びにおいて得られる事柄だと思えます。大学時代をどのように過ごすか、鍵になってくると思うのです。皆さんが知的好奇心のアンテナをはり巡らせて大学生活を送れるように、私たち教員も、皆さんのアンテナを刺激できるように授業をしたいと改めて気が引き締まる思いです。

## 英文学を大学で 学ぶことについて



水尾 文子 教授

新入生に志望動機を聞くと、「英語力をつけたい」、「英語圏の文化に興味がある」、「英語教員になりたい」という答えが返ってきます。こと英文学については、「ハリー・ポッターが好きです」といった何らかの反応を示してくれる学生がいる一方で、「イギリスの文化や言語に関心があります」、「文学には……」と言われることも少なくないのが現状です。そもそも、文学は、言語や文化とそんなに異なるものでしょうか？

結論から言えば、文学、文化、言語は、密接な関係にあります。文学の研究は、文学作品のなかに作品の背景となる時代の文化、社会、歴史、言語を探ることもあります。「文学の研究は、言語と文化とは別」と考える人がいるとすれば、読書感想文を念頭においているのかもしれませんが、文学研究は、読書感想文とは異なり、作品の舞台となる時

代、文化、社会、さらには思想的な背景に照らして作品を論理的に分析し、結論を導き出します。根拠に基づいて自身の意見を述べる客観性が求められます。

ルイス・キャロル (Lewis Carroll) 作『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*, 一八六五、以下『アリス』) を例に考えてみましょう。ウサギを追いかけて穴に落ちた主人公アリスが次々に非現実的な体験をする、イギリスを代表する児童文学作品として有名な小説です。この作品が発表されたヴィクトリア時代(ヴィクトリア女王が統治していた一八三七年から一九〇一年)の文化的背景に照らして作品を見ると、『アリス』を『ヴィクトリア時代の文化に対する作者キャロルの辛辣な風刺』と読むことができます。ヒントとなるのは、『アリス』出版時に作品に入れられた挿絵です。挿絵を描いたのは、当時人気を博し

た風刺雑誌『パンチ』(*Punch, or The London Charivari*) に半世紀にわたり風刺画を描き続けたジョン・テニエル (John Tenniel)。テニエルが『パンチ』に描いた挿絵は、中流階級の日常生活を笑いとくに辛辣に風刺したものばかりです。そんなテニエルの手による挿絵が挿入された『アリス』を読んだ当時の人たちは、『アリス』を単なるおとぎ話とは思わなかったでしょう。作者キャロルが挿絵について細かい指示をテニエルに出していたことが分かっていきます。キャロルがこの作品に風刺的メッセージを込めた可能性が浮上します。例えば、『アリス』第六章「ふたとコショウ」(Dig and Deepen) の冒頭では、アリスがカエルと魚の姿をした二人の男性使用人に遭遇し使用人たちのばかげたやり取りに呆れてしまう場面なのですが、この場面に添えられた挿絵(図一参照)と酷似した風刺画が、



# MEMBER



文学部・経済学部  
非常勤講師  
滋野 正道



文学部准教授  
能美 潤史



文学部准教授  
野呂 靖  
司会



文学部准教授  
許 秀美



文学部講師  
内田 智子



文学部講師  
内田 准心



文学部卒業生  
田中 さきの

\* 敬称略 \* 所属・職位等は2022年3月時点。

# SYMPOSIUM



座談会 | 龍谷大学文学部  
「龍谷IP」

現場の教員、学生チューターが語り合う

## 龍谷大学文学部が 取り組む新しい学び、 その効果

2018年、龍谷大学文学部の新たな取り組みとしてスタートした  
龍谷IP事業「地域協働と学科・専攻横断による実践的学修プログラムの構築」。  
人文系PBL（Project Based Learning）という新しい学習プログラムを確立すべく、  
文学部内の学科専攻の垣根を越えて学びあい、  
教室を飛び出して地域社会とつながるなど、  
自主行動を伴った多様な形態の学修を展開しました。  
この文学部の新たな学びにチャレンジした教員、  
龍谷IPの学生チューターを務めた卒業生が集まり、  
学びの現場の様子、学生の成長、そして文学部の今後の展望などを語り合いました。



文学部の学生は  
おとなしい？  
のではなかった！

■野呂 今日はお集まりいただきありがとうございます。これまで文学部にはなかった新たな授業だったと思います。まずは皆さんのご感想について、ご苦労なども含めてお願いします。

■許 私は「スタートアップコース」を担当しました。実は、日頃から文学部の学生は、控えめと感じていましたし、ほかの学科専攻との関わりもあまりないので、全学科専攻の学生が一堂に会してのグループワークに取り組みめるのか、不安でした。しかし、実際はものすごくできる子たちで、驚きました。

■野呂 グループワークが苦手なわけではないかというのは、教員の先入観だったのですね。

■内田准心 そうです。私も

許先生と同じことを感じました。私が担当したプロジェクト実践発展演習<sup>1</sup>では、他学科他専攻の学生はもちろん、先輩や外部の方とも関わっていくのですが、学生の誰もが臆することなく、取り組んでくれました。これには、授業をサポートしてくれる学生チューターの存在が大きかったですね。チューターは、学生から見ると同じ学部先輩。龍谷IPの授業を経験しているチューターもいるので、アドバイスが当を得ているんです。学生に安心感も与えてくれて、活発な発言、積極的な行動につながったと思います。

■野呂 チューターを務めた田中さんはその点はどうですか。

■田中 確かに受講生との距離の近さ、学生目線のアドバイスは効果があつたと感じています。まず、自己紹介や発表を躊躇している学生には、「私と個別にやってみようよ」と声をかけました。何度か試す





うちに慣れてきて、大きな声で堂々と話してくれるように。また、「この子は人前に立つのが苦手だけれど、話は上手だな」と気づいた点は、「すごいよ」と称賛しました。すると、自分の得意がわかり、授業にもっと前向きに取り組むようになってくれました。

■野呂 なるほど。受講生と同じ経験を持つからこそ導きですね。滋野先生は、人・地域・組織における良好な関係づくり、コミュニケーションを専門とされています。龍谷IPで実践された具体的な場づくりの方法を教えてください。

■滋野 学生の背中をそっと押すような「きっかけづくり」を心がけました。例えば、教員から発言を促すよりも、田中さんのような立場の近いチューターが語りかけることで学生が「わたしも発言してみようかな」と気持ちに変化します。そのような対話の積

み重ねによって心理的安全性が生まれます。結果的に場の雰囲気や良くなり、学生同士のコミュニケーションが円滑かつ活発になると、プロジェクトの質も成果もぐんと向上していきましたね。

### 文学部ならではの「言葉」を主眼としたPBL

■野呂 今回の龍谷IP事業の最大のポイントは、人文科学系学部がPBL科目に取り組んでいることです。PBLは、本学では、政策学部や社会学部などの社会科学系学部で盛んにおこなわれていますが、文学部が取り組むPBLの独自性はどこにありますか。

■能美 龍谷IP事業では、新たに人文系PBLプログラムの構築を図りました。内容としては、文学部共通の学びである「言葉」を媒介とし、さまざまなセクターを超えて

社会貢献につなげていく、社会をつなぐ「言葉」を基軸とした「実践的ライティング」を修得する教育プログラムの展開です。

■野呂 文学部の学びの根幹には「言葉」があり、文章で表現していきます。そのため、「言葉」に主眼を置いたということですね。

■能美 その通りです。文学部の学びの集大成は卒業論文にあります。これがいわばアカデミックなライティングだとすると、『京都えきにし』の取材・記事作成は「実践的ライティング」です。そこで、ライティング能力を養成すると、卒業論文の執筆にもつながっていきます。つまり、文学部のPBLは、「言葉」が基軸であるという点が、社会科学系学部のPBLとの大きな違いです。

■許 言葉をしっかり考えるのは、文学部の根幹ですもの

ね。そこに、言葉を発するプレゼンテーション能力、言葉を使つてのコミュニケーション能力が身についていくことも人文系PBLプログラムの独自性ではないでしょうか。

■内田准心 もうひとつの特長は、学生に企画の主体があるということです。極端な言い方かもしれませんが、社会科学系学部のPBLは連携する企業や団体などにメリットをもたらすことを学生が企画します。一方、今回の文学部の取り組みは、『京都えきにし』の記事にしても、そこに学生の思いや、文学部の学びで得た知識などが落とし込まれていきます。

■野呂 確かにそうです。私が担当した「プロジェクト実践発展演習」は、地域の企業や団体などと一緒に進めていくのですが、そのプロジェクトの目的、企業・団体の価値を別の視点、つまり学生たちの目線から追求していきました。

■滋野 文学部での学びによって得た知見を活用しながら、そういった学生たちの目線、考察を取り入れた文章を書いてもらうには、工夫が必要でしたね。

■内田智子 『京都えきにし』の記事でも、最初に何も説明せずに文章を書いたらうと、「〇さんがうとおっしゃいました」「〇さんはうと話されていました」と、カギカッコ付きの台詞をつなぎ合わせたような形になって、学生たちの考えや思いが出てこない文章になってしまふんです。なので、学生たちには、何度書き直してもらいました。

■許 学外に発信する公式な文章としては当然ですが、自分の書いた文章は社会では通用しないと、気づかせることも必要です。もちろん、文章を書くのが苦手な学生もいます。でも、本当に文章を書くのが苦手なのか実のところ本人たちは分かっている。学生たちは実際に取り組んでみ

て、「意外とできる」という気づきを得、そうした成功体験を通じて、苦手意識が変わっていきます。

■能美 その通りです。文学部PBL・AL（アクティブ・ラーニング）は、『京都えきにし』の記事をはじめ、言葉として紡ぎ出したものが成果物になります。「自分達の力で成果物を作ったぞ」という成功体験が自信につながります。私の担当の中でも文章が苦手な学生がいました。そこで、記事ではなく、龍谷IPの発表資料を作成してもらったところ、上手く書いてくれました。通常の講義のレポートや卒業論文も「自分はちゃんと書けるんだ」と捉えてくれたようです。

### 文学部の卒業論文にも知識と「実体験」が必須

■野呂 「実践的ライティング」が卒業論文につながるこ

とについて、田中さんに聞きたいのですが、卒業論文は「学生チューター」をテーマにしたそうですね。

■田中 はい、そうです。サポートした学生はもちろん、学生チューター自身も成長するのかに着目しました。執筆にあたっては、自分の経験則に加えて、龍谷IPの受講生と学生チューターへのインタビューを敢行。受講生は、自分の苦手分野を克服できた、得意分野がさらに得意になった、文学部入學時点にはなかった新しい目標ができたとの声の間かれ、龍谷IPの効果を実感しました。

■野呂 なるほど。受講生の成長や自己理解という成果ですね。

■田中 チューターの学生は、志望動機として「人と話すこと、人前で発表することが苦手なので克服したい」ということが一貫していました。私

もそうで、受講生と多く関わっていくことで苦手意識がなくなりました。一方、私が課題として感じ、卒論で論証したのは、学生チューターと先生との関係性です。大半の学生チューターの目標が苦手克服にあるので、例えば、授業中に「チューターさんはどう思いますか」といった投げかけをいただくと、学生チューターが人前で話す機会が増える、それが受講生のアドバイスにもなるといった、良い循環、相乗効果を生むと考察しました。

■能美 教員のアシストですか。参考になります。学生チューターの動機を把握するといった、担当教員とのコミュニケーションも重要ですね。

■田中 はい。ただ、こういった課題は、実際、学生チューターを経験したから気づいたことであり、それをテーマに、リアリティのある卒論を書けたことがよかったです。

## コロナ禍に発動した 龍谷IPによる「主体性」

■野呂 卒業論文への結果に加えて、ほかにも学生チューターを担当したことでの成果を教えてください。

■田中 どのプログラムも先生の指導、学生チューターのアドバイスが必須です。ただ、それに則るだけでは、本当に学生が作ったもの？考えたこと？と感じました。教えずにと主体性がなくなる。かといって、放置では受講生が戸惑い、プログラムとして成立しない。私にはこのアドバイスの加減が難しく、教える、伝える内容の言語化と、声かけのタイミングは、先生方と相談して、実行していきましました。

■滋野 田中さんが話した主体性は、本事業で大きく掲げられた指針です。その成果として、挙げられるのが「龍谷大学先輩ズ」という活動です。

■滋野 本事業自体の成果はもちろん、例えば、人文系PBLプログラムでコミュニケーションに慣れた学生や文章作成が上手い学生がロールモデルになることで、ほかの講義での活躍やこのプログラムを受講していない文学部生への相乗効果も期待しています。

■能美 私の通常の講義でも、人文系PBLプログラムを受講した学生に「発言に自信がなさそうなクラスメイトに、声をかけてあげて」と頼みました。すると、はじめは恥ずかしそうにしていた学生も、だんだんと大きな声で生き活きと発言してくれるようになりまし。大きな声で発言を」と教員からいうと、「先生に怒られた」と萎縮する学生もいますが、友だちからいわれると「そうだよね」と素直に受け止められるのです。

■野呂 これまでの文学部の学びは教員単独で進めていく傾向にありましたが、人文

事業がスタートして二年目の二〇二〇年、全世界がコロナ禍に見舞われました。入学式も中止になり、新入生は孤独感を抱えながら過ごしていました。そんなとき、田中さんをはじめとする学生チューターが中心となり、「龍谷大学先輩ズ」を立ち上げ、SNSを活用して新入生の履修相談や日常の悩みに応え、オンラインでの交流を自らの力で実施したのです。この取り組みは後に全学にも波及していきましました。

■田中 とにかく何とか力になりたいと思って。誰とはいわず瞬く間に「龍谷大学先輩ズ」が立ち上がりましました。

■野呂 素晴らしいですね。本事業の成果の証でもあるので、教員としてはさらに感慨深いです。

■田中 課題発見と主体的な行動、仲間との協働というスキルは、(本事業が運営している)授業で修得できましました。「龍

系PBLプログラムは、学生チューターのサポートと共に進めていく。そして、新たな学びの価値を受講生と共に創造していきまします。これを通常の講義にも反映させていけば、文学部の学び全体が活性化、拡充しましますね。

■許 私が担当する語学の授業は、母国語とは異なる言語を覚え、発しなればいけないので、より手厚い指導と、学生一人ひとりに合わせたサポートが不可欠です。そこで、悩んだり、脱落しそうになつたりしたとき、教員はもちろん、先輩や学生など見守つてくれる人がたくさんいることは安心につながります。例えば語学が苦手でも、文学部には自分を活かせる学びが多数揃っています。人文系PBLプログラムは、それに気づく貴重な機会でもあります。自分の学びや成長、そして可能性を制限しないで欲しいというメッセージをこれからも伝えていきたいです。

谷大学先輩ズ」の経験は、小さなものではありませんが、社会に役立てることを実感しましました。

## 学生も教員も一丸となって 「文学部と真ん中」 の学びを！

■野呂 最後に改めてこの5年間の龍谷IPの成果と、これからの文学部について、聞かせてください。

■内田准心 文学部の学びの集大成は、卒業論文ですが、自ら発見した疑問、課題を根拠を集めて論証し、主張を導き出すという点で、本事業の人文系PBLプログラムの取り組みと卒業論文はまさにイコールです。卒業論文に至るまでには、従来通りの文学部のアカデミックな学びと、これまでの文学部にはなかつた新しい実践との融合が効果的です。文章が苦手、発言が苦手だからと、物怖じして、書

く・考える・行動することを止めてしまわないよう、人文系PBLプログラムの中で成功体験を積み重ねていくことで自信をつけてほしい。また、卒業論文を書き切る忍耐力も養つてほしいですね。

■内田智子 私の場合は、専門分野の特性上、卒業論文について、「こう書きなさい」と教えるよりは、「こういう文章の手法や論証の資料を使ってみては」というアドバイスをおこないます。それは、『京都えきにし』の記事作成でも同じ。こういった点を他の文学部の先生方とも共有していければと考えています。

■内田准心 自分で問題を提起して根拠を並べて主張を示していく。こういうと文学部とはかけ離れているようですが、決してそうではなく、人文系PBLプログラムは、『文学部のと真ん中の授業』でもあるのです。

との関わりを意識しながら学びを展開していきまします。本日は皆さん、ありがとうございます。

■能美 本事業を通じて、学科専攻や学年の枠を越えて楽しく学び、学生間の交流を深めていった学生たちの姿を見て大変うれしかったです。龍谷大学文学部にはたくさんの方の学科専攻があり、これだけ多様な学生がいるのだということとを再認識する機会にもなりました。教員として、多くの学生と関わりを持てることは非常に楽しく、学生たちが成長してくれることに喜びを感じましました。こういった教員のメリットもアピールしていきたいと考えています。

■田中 私は、学生チューターになつたことで、「人はこうやって成長していくんだ」ということを学ぶことができました。これから、人材の育成や教育に関する仕事にも携わっていければと思います。

■野呂 龍谷大学文学部は、これからも学生の成長を第一に、各学科専攻の学びを大切にしつつ、それらがもつ社会



## 文学部で学ぶということ

2024年3月発行

### 発行人

玉木 興慈（龍谷大学文学部長）

### 編集人

出羽 孝行（文学部教授）、滋野 正道（心理学部講師）

### 発行・企画・編集

龍谷大学文学部

〒600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町125-1

TEL 075-343-3311

©RYUKOKU UNIVERSITY

本書掲載内容、および写真、イラスト等は許可なく転載・複製することを禁じます。

掲載内容は、2024年3月時点のものであり、実際とは異なる場合があります。

### デザイン

久野 紗都美（かわうそデザイン）

### イラスト

三輪 夏生

# CONCLUSION

## おわりに

龍谷大学文学部は、6学科6専攻に分かれ、在籍する学生はおよそ3800名と、本学で最も多くの学生が在籍する学部です。1・2年次は深草キャンパスで、正課・課外を含めて他学部の学生と交流しながら学び、3年次以降は歴史ある大宮キャンパスで専門的な学びを深めます。

本学最大の学生数を有すること、そして2つのキャンパスで学ぶことは、文学部ならではの学びのスタイルといえるでしょう。これらは文学部の大きな特徴ですが、時には課題にもなり得る点です。1年次には、各学科・専攻で大学入門的な演習科目が揃っており、入学直後から大学での学びを実感できます。しかし、学科・専攻を超えて学びを共有する機会は限られています。また、1・2年次により早く深草キャンパスでの大学生活に慣れた頃、3年次には大宮キャンパスでの学びが始まり、環境の変化に戸惑う学生もいます。これらの特徴を活かしつつ、課題を利点に転換する取り組みこそ、2018年度から始まった「協働」と「横断」を目指す本プロジェクトの意義です。

開講した4科目は、文学部が培ってきた専門知（＝人文知）を活かし、社会との連携を通じて学びを深める社会連携型プログラム（PBL）として設計されています。それぞれの科目には独自の特徴があり、学生は自身の学科・専攻を超えて「学生・教職員・社会」とのつながりを持ち、学びのコミュニティを広げることを目指しました。この「協働」と「横断」を通じた学びのスタイルは、新たな関係性や偶発的な発見を生み、文学部での学びに新たな可能性をもたらしたのではないのでしょうか。本プロジェクトでの取り組みが一過性のものに終始することなく、今後の文学部教育のさらなる発展に寄与することを願っています。

文学部龍谷IP教育開発支援員 滋野 正道



